

小特集ルベン・ダリーオ没後 100 年 (3)

ルベン・ダリーオ詩選

竹村 文彦 訳



金星(ウェヌス)

夜のしじまに、辛い郷愁に苦しんでいた私は、
安らぎを求めて、爽やかで静かな庭に下り立った。
暗い空で金星が美しく、震えながら輝いていた、
まるで黒檀に象眼された神々しい金色のジャスミンのように。

恋する私の心には、東洋の女王の姿と見えた。
化粧部屋の天井のもとで愛人を待つのか、
肩に担がれた輿こしにゆったりと座り、
勝ち誇ってきらめきながら深い広がりを渡るのか。

「おお、金髪きんぱの女王よ!」と私は語りかけた。「私の魂たまごは蛹から出て
あなたのもとへ飛んでゆき、あなたの炎の唇に口づけたい。
あなたの額かみに淡い光をまき散らす暈かすみのなかを漂いたい。

そして恍惚の星となって、あなたを一瞬も離さずに愛し続けたい」。
夜の風が熱した大気を冷まし、
金星は深い淵から、悲しげなまなざしで私を見ていた。

* * *

アンジェラスの鐘の甘美さ

田舎の素朴な鐘から空中に溶け出る
神々しい朝方のアンジェラスの鐘の音の甘美さ。
薔薇の茂みと、祈りと、乙女の夢想と、
小夜鳴き鳥のさえずりの力で

空気は無垢になり、一切が神を信じない
粗暴な運命に抗う……。曇ったガラス越しに
午後が巻き取る夕暮れ時の金色の糸玉。
継ぎ目のない、われわれの不幸の布が織られる。

それはみな肉欲でできた不幸、ワインの香りが漂う不幸……。
そして、何もかもが味気ないというこの言いようのない辛さ、
舐先^{へさき}をどこに向けるべきか分からない辛さ。

その間にも哀れな小舟は、曙光に見捨てられ、
闇夜の敵意ある波の間をさまよう……。
(おお、夜明けの心地よい鐘の音よ！)

* * *

レダ

翳^{かげ}のなかの白鳥は、雪のようだ。
明け方の光を透かして見ると、その嘴は琥珀^{くちばし こはく}の嘴だ。
かくも果敢^はなく過ぎる柔らかな曙^{あけぼの}は、
純白の翼を光で薔薇色に染める。

やがて朝焼けがその紅を失ったのち、

青い湖の波間に浮かび、
翼を広げて首をくねらせた白鳥は、
日の光を浴びて銀の鳥となる。

これが絹の羽をふくらませた鳥、
愛の傷を負ったオリンポスの鳥の姿だ。
そして鳴り響く水のなかでレダを犯す、
花咲く唇を嘴で探りながら。

裸の美女は、打ち負かされて吐息を漏らし、
彼女のあえぐ声が風に流れる間に、
こんもりとした茂みの奥の緑から、
パンのうろたえた目が火花を散らす。

* * *

憂鬱

ドミンゴ・ボリーバルに

兄弟よ、君には光があるのだから、私の光を示してくれ。
私は盲人のようだ。めざす方向もなく、手探りで歩む。
嵐や暴風のもとを私は行く、
夢に目がくらみ、諧調ゆえに正気を失って。

これが私の宿痼^{しゆくあ}だ——夢みる。詩とは
千もの残忍な刺^{とげ}のついた鋼鉄の衣、
私が自分の魂にまとわせた衣だ。血に飢えた刺は、
わが憂鬱^{しゆく}の雫^{しずく}をしたたらせる。

こうして私は目も見えず、正気も失い、この辛い世の中を渡る。

ときに道はとても長く思え、
ときにはとても短く思える……。

英気と苦悶の間を揺れながら、
私は悲嘆にひたり、こらえ切れないほどの重荷を担ぐ。
わが憂鬱の雫のしたたりが君には聞こえないか？

* * *

宿命

ルネ・ペレスに

ほとんど感覚のない木は幸せだ。
堅い石はもっと幸せだ、もはや何も感じないのだから。
なぜなら、生きている痛みより大きな痛みはなく、
意識ある生より大きな悲哀もまたないからだ。

この世に在りながら何も知らされず、向かう方向も定まらずに
在る。
これまで在ったことへのおびえと、行く末への恐怖……。
明日には死んでいるという戦慄の確かさ。
そして人生ゆえに、影ゆえに苦しみ、

知らないことや、思いもよらぬことゆえに苦しむ。
そして、みずみずしい房で誘いかける肉と、
不吉な花束をたずさえて待ち受ける墓、
そして、どこへ行くのかも、
どこから来たのかも分からない……！

* * *

【解題】

ルベン・ダリーオの数多くの名品の中から、ここではソネットなど短い詩型で書かれた5篇を選んで訳出した。最初の《金星（ウェヌス）Venus》は、短篇小説と詩を収めたダリーオの出世作『青……』*Azul...*（1888年）の増補版（1890年）に収録されたもので、残りの4篇は、詩人の最も重要な詩集と目される『生命と希望の歌』*Cantos de vida y esperanza*（1905年）に属している。以下では、それぞれの詩に簡単な解説を加えよう。

Venusは太陽系の惑星、金星を指すと同時に、愛と美の女神ウェヌスをも意味する。それゆえ最初に訳した詩において、「私」が宵の明星を見上げて熱烈な愛を告白するとき、「私」は愛と美の理想への憧れを表白してもいるのだ。しかし、オクタビオ・パスが「スペイン語で書かれた中で最も痛切な詩句のひとつ」（「巻き貝と人魚」）と評する最終行は、そうした理想が決して到達し得ないものであることを示唆する——「金星は深い淵から、悲しげなまなざしで私を見ていた」。従来、11音節詩句で綴られるのが常であったソネットに17音節詩句を採用した点で、この詩は韻律の面でも革新的である。

「芸術への愛と愛への愛」（「私の詩集の履歴」）を謳歌し、異国趣味や斬新で華麗な語句を特徴としていたダリーオの詩は、『生命と希望の歌』に至って内面的な深まりを見せ、自分の半生への悔悟や生きる苦しみをより直截的な言葉で歌うようになる。また詩人は、社会問題も詩のテーマとして取り上げ、アメリカ合衆国の脅威を訴えるとともにラテンアメリカとスペインの連帯を呼びかけもした。

《アンジェラスの鐘の甘美さ *La dulzura del ángelus...*》の中で、時間は明け方から夕刻へ、そして真夜中へと淀みなく流れる。この時間の流れに沿って、「私」の心情もキリスト教信仰に救いを見出す気持ちから、女と酒に溺れた半生への罪の意識へ、そして人生の意味が見つからない苦悩へと移り変わる。闇夜の波間に漂う小舟のイメージは、人間の寄る辺ない状況を巧みに表現しよう。最終行で暗示される新たな夜明けによって、「私」はふたたび信仰へと回帰する。アンジェラス（お告げの祈り）の鐘は、聖母マリアへの受胎告知を祝する祈りの合図として、朝、昼、夕刻の一日3回鳴らされる。

次の詩《レダ *Leda*》は、スパルタ王妃レダが、白鳥に姿を変えた最高神ゼウスと交わったというギリシア神話の一挿話を再創造している。ここでも時間は、夜明け前から明け方へ、そして真昼時へと経過し、それに伴って白鳥の色も、雪の白さから曙光に染まって薔薇色に、さらに日中の太陽を浴びて銀色に変わる。白鳥の嘴の琥珀色、湖の青、茂みの緑もここに加わり、この詩の彩りを豊かにしている。こうした豊かな色彩感、古代神話の援用、白鳥が官能的な愛のシンボルとして登場する点など、この詩篇にはむしろ前期のダリーオの特徴が見出される。それも当然で、『生命と希望の歌』に収められてはいるものの、この詩が実際に執筆されたのは1892年のことである。最終行のパンは、ギリシア神話で牧畜の神であり、山羊の角と脚をもつ好色な半人半獣神。

《憂鬱 *Melancolía*》は、訳の分からないこの不条理な世界に生きる苦しみが最も色濃く

現れた詩のひとつである。「私」は、「めざす方向もなく、手探りで歩む」。同時にこの詩には、詩人としての生みの苦しみが表示されている——「詩とは千もの残忍な刺のついた鋼鉄の衣、／私が自分の魂にまとわせた衣だ」。詩篇が捧げられたドミンゴ・ボリーバルは、ダリーオがパリで親交を深めたコロンビアの画家で、のちに米国に渡り、1903年にワシントンで自殺した。そこで、最初の行の「君には光があるのだから」を、ボリーバルが他界してあの世を知り、ある種の真理に達したと結びつける解釈もある。

詩集の掉尾^{ちようび}を飾る《宿命 Lo fatal》は、コロンビアのノーベル賞作家ガルシア・マルケスから、「スペイン語で書かれた最も偉大な詩」と絶賛された名作である（寺尾隆吉「孤独と物語」『ユリイカ』2014年7月号）。最初の連で、「私」は感覚や意識を有する存在の不幸を語り、木や石に羨望の念を抱く。植物や鉱物から人間を区別し、特権的な存在にしている価値がまさに不幸の元凶だというのだ。前期には反対に、五感を通じて得られる歓びに酔い痴れ、音楽性や色彩感に富んだ詩を書いていたダリーオであるだけに、こうした悲観主義的な認識の表明は一層痛々しい（ペドロ・サリーナス『ルベン・ダリーオの詩』）。第2連以下では、意識ある存在の不幸が次から次へと繰り出され、列挙が続くうちに詩は唐突に閉じられる。この詩は13行からなり、ソネットを構成するには1行足りない。しかも最後の2行は、それぞれ9音節と7音節の詩句で、残りの詩句の14音節に達していない。前期の詩の、非の打ちどころのない形式美が調和的な世界の写しであったとするなら、こうした形式上の欠落は、破綻した世界を象徴的に示しているように思われる。この作品が捧げられたルネ・ペレスは、チリのピアニストで、パリ時代のダリーオの友人。

なお、翻訳の底本には Rubén Darío, *Obras completas I Poesía* (ed. Julio Ortega), Barcelona, Galaxia Gutenberg / Círculo de Lectores, 2007. を使用した。